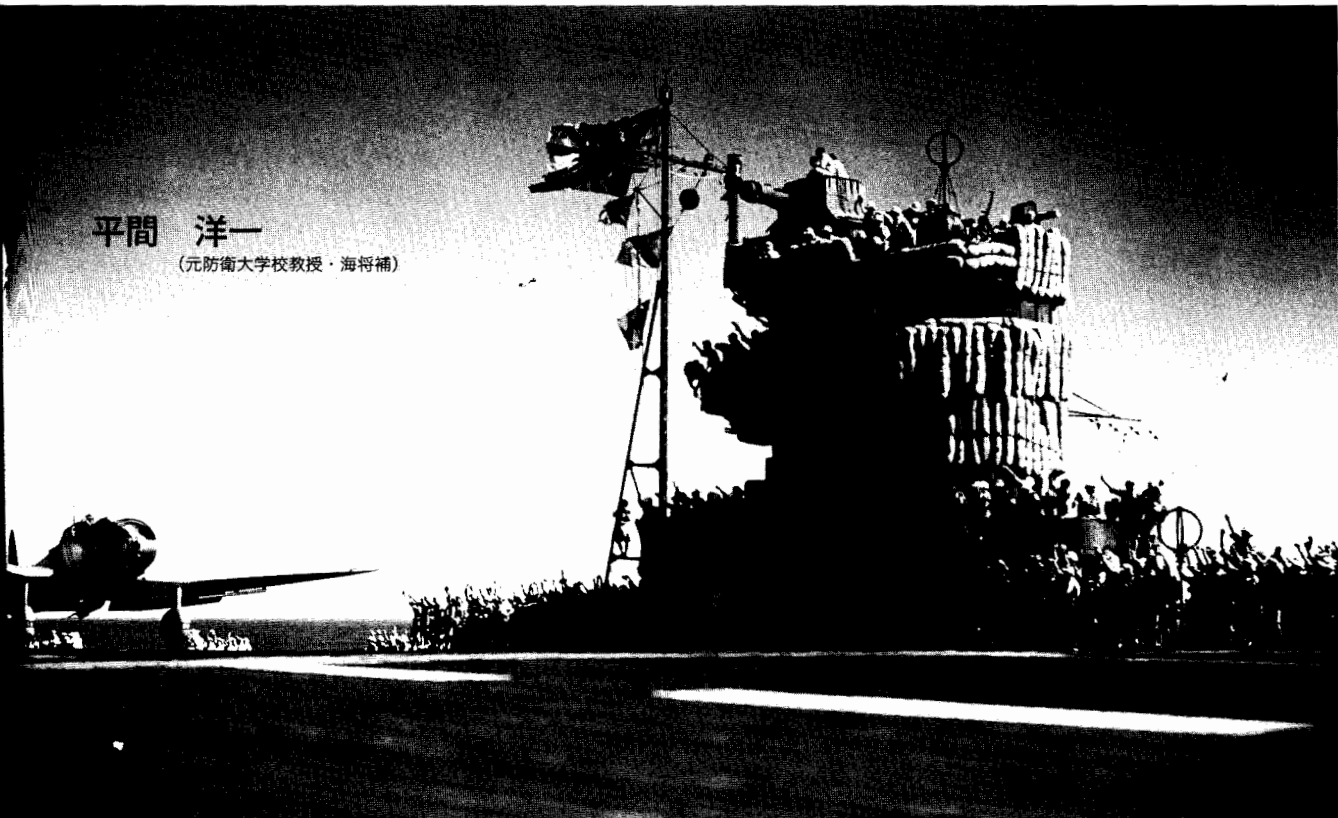


戦略面から見た 日米空母 太平洋の戦い

BATTLES OF JAPANESE & U.S. AIRCRAFT CARRIERS IN PACIFIC WAR by Yoichi Hirama

平間 洋一

(元防衛大学校教授・海将補)



乗員の大声援を受けながら空母赤城から発艦する九九艦爆。

★はじめに

日本の対米戦争計画は1923年の「帝国軍ノ用兵綱領」で裁可された邀撃漸減作戦であったが、ワシントン・ロンドン会議で主力艦の比率を抑えられると、日本海軍は条約外の航空兵力に期待し、南洋群島の陸上基地を活用しようとして航空機を徐々に重視するようになった。そして運用面でも陸上航空機を機動運用する第11航空艦隊、空母搭載機を統一運用する第1航空艦隊などの独特の運用法を開発し、開戦前にはアメリカの8隻に対して10隻の空母を保有していた。

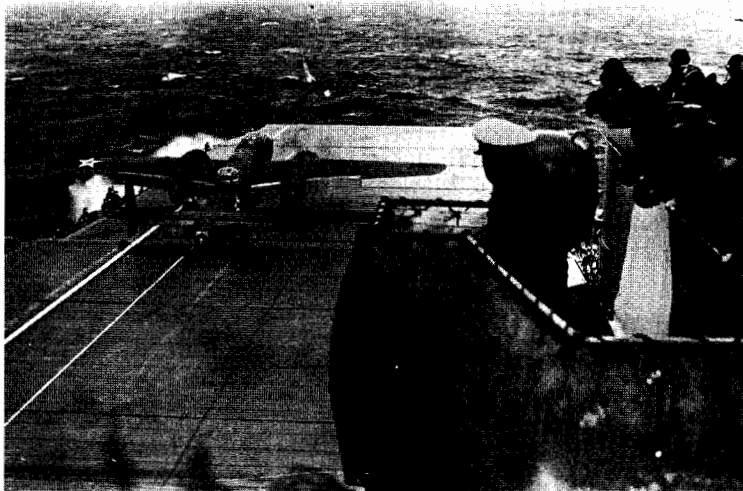
一方のアメリカは大艦巨砲主義を脱皮できず戦艦を重視し、日本海軍の10隻に対し16隻を保有していた。また、対日戦争計画は1921年に海兵隊が策定した、前進基地となる南洋群島の島々を逐次占領し、艦隊の前進基地として飛び石伝いに日本に迫るマイクロネシア前進基地構想を基軸とし、1924年にはオレンジ計画に組み入れ大統領の承認を得ていた。

では実際の戦争はどう推移したのか？ 本論は日米空母の戦いが太平洋戦争の全戦局に与えた影響、特に戦争指導や軍事戦略面から検証するものである。

★禍根を残した初動作戦

空母6隻を使用し3,500海里離れたハワイに350機を投入した機動航空攻撃と、それに続く南太平洋からインド洋へと地球の3分の1を駆け抜けた南雲機動部隊の機動力と破壊力に世界は驚嘆した。しかし、ハワイ奇襲では最後通告が間に合わず、卑劣な「騙し討ち」と敵愾心を高め、対日戦争に長期間国民が耐えられるかと、米海軍が常に悩んできた問題を一瞬にして解決し、米海軍のみならず全国民を一斉に立ち上らせ、3年9カ月も戦わせてしまった。米太平洋艦隊を壊滅させるという戦術目的は空母が不在で達成されず、戦争指導という観点から見ると完全な失敗であった。

一方、戦艦部隊を一瞬に失った米海軍は、空襲を免れた空母ヨークタウンYorktown CV-5、大西洋から回航



1942年4月18日、東京初空襲の任を帯びて空母ホーネットHornet CV-8から発艦するドウリットル搭乗のB-25爆撃機。(U.S. AIR FORCE)

したエンタープライズEnterprise CV-6で空母任務部隊を編成し、翌年2月にはギルバートやマーシャル諸島、3月には南鳥島やラエ、サラモア、さらに4月18日にはホーネットHornet CV-8搭載のB-25爆撃機で本土を奇襲するなど、機動力と打撃力に優れた空母部隊の特質を生かしたヒット・エンド・ランの攻撃を開始した。

大本営が米英豪遮断の戦略的価値を聴取した前日の2月20日には、連合艦隊司令部ではインド洋進攻作戦の図上演習が行なわれていた。この図上演習は42年秋のハワイ攻略作戦に先んじて、連合艦隊主力をインド洋に展開してセイロン島を攻略、迎撃に出て来る英艦隊を撃滅し、さらに進んでアフリカ東岸に至るインド洋を制圧、中近東に進出するドイツ軍と連携を図り、戦争終結を目指すという雄大なものであった。しかし、大本営の「戦争終結に関する腹案」は、「英米蘭ノ根拠ヲ覆滅」し重要資源地域を確保し、「長期自給自足ノ態勢」を維持すべきとしていたし、陸軍も兵力を派出する余裕がないと反対したため、インド洋作戦は4月初旬に南雲機動部隊がコロンボとトリンコマリを急襲し、英東洋艦隊をアフリカに後退させたに留まった。

日独連合作戦という視点から見ると、当時のインド洋は連合国にとってアジア、オーストラリアとヨーロッパを結ぶ動脈で、ロンメル機甲軍団と戦っているMontgomery軍のアフリカ作戦を左右する後方支援線のアキレス腱であった。また、インド洋は英戦時経済に不可欠な資源、食糧の供給ルートでもあった。ロンメル戦車軍団は5月に進撃を始め、6月にはエジプト領内に進攻するなど快進撃を続けていた。一方、インドでは日本軍の快進撃に、ガンジーを中心とする国民会議派が反英運動を激化し、8月9日にはガンジーやネルーなどを逮捕し

沈静化に努めたが、10月8日には死傷者300余名を出す反英運動に発展するなど、イギリスは日本軍の勝利に伴い激化したインド独立運動に手を焼いていた。フランスの歴史学者ホーナーは、1940年末から42年の初めに日独が連携してインドや中東などで、反英施策を強化していたならば民族解放の決起が起こり、イギリスに測りきれない打撃を与えたであろうと述べている。

★戦局の転換点

インド洋作戦後の42年5月1日、豪米遮断のポート・モレスビー攻略作戦(MO作戦)が発動された。瑞鶴、翔鶴などのMO機動部隊は高木武雄少

将が、祥鳳を含むMO攻略部隊は五藤存知少将が指揮していた。一方の米海軍は阻止しようとレキシントンLexington CV-2とヨークタウンを投入した。この戦闘は世界最初の敵を見ない戦い“Battle over the Horizon”と呼ばれる空母対空母の海戦であった。この海戦で日本海軍が失ったのは小型空母祥鳳と航空機93機、米軍は大型空母レキシントン、駆逐艦1隻とタンカー1隻に航空機69機で、戦術的には日本海軍の辛勝であった。しかし、主目的のポート・モレスビー上陸作戦を中止し、戦略的には敗北した海戦となってしまった。

一方、日本海軍のインド洋での活動を憂慮したチャーチルは、ルーズヴェルトに南雲部隊を牽制し太平洋に戻らせるよう求め、これに応じたのが42年4月18日の米空母ホーネットによる本土空襲であった。被害は軽微ではあったが、この空襲が山本五十六長官のミッドウェー島攻略作戦の主張に力を貸し、主力空母4隻を失いサモア・フィジー攻略作戦も、秋のハワイ攻略作戦も断念させられるなど、ミッドウェー海戦は戦争の転換点となった海戦であった。

日本海軍がミッドウェーで敗北すると、インドでは過激な反英独立運動も下火となり、ガンジーなどの国民会議派もイギリスに擦り寄り、中南米の中立国も枢軸国に宣戦布告を発し、スペインやスウェーデンなどの中立国も連合国寄りの姿勢へと変化していった。

★ガダルカナルをめぐる戦い

42年8月7日にガダルカナルへ米軍が上陸すると、大本営では逆上陸により撃退しようとする一木支隊の派遣を決め、新編の南雲忠一中将指揮の第3艦隊(空母2隻、小型空母2隻)を出撃させた。一方、米海軍は日本の増援

部隊を阻止しようと、ハルゼー指揮の第16・17空母任務部隊（2隻）を投入した。この海戦の損害は日本が軽空母1隻、アメリカがエンタープライズ中破で、勝敗の不明確な海戦であったが、南雲司令長官の戦意不足からガダルカナルへの逆上陸を中止し、戦略的には日本側の敗北となった。

1942年10月、陸軍のガダルカナル総攻撃を支援しようと、近藤信竹中将指揮の前進部隊（戦艦2隻、軽空母1隻）と南雲中将指揮の第3艦隊（空母2隻、軽空母1隻）を派出した。これに対してアメリカはハルゼー中将指揮のエンタープライズ、キンケード少将指揮のホーネットを送り阻止しようとした。日米の空母戦は10月26日に始まり日米互角の戦いが続いたが、南雲司令長官が空母2隻を撃沈したと誤判断し戦場を去ったため、日本海軍には1隻の沈没もなく、米海軍が大型空母ホーネットと駆逐艦1隻を失い、大型空母エンタープライズも中破し、戦艦1、巡洋艦1が被害を受け、キング作戦部長が「史上、最悪の海軍記念日」と述べたように戦術的には米海軍の敗北であった。

しかし、ガダルカナル島への逆上陸は再び中止され、さらに母艦航空戦力を失い、ワスプWasp CV-7が9月に潜水艦に撃沈され、米海軍が1隻の可動空母も持たない絶好の好機に戦果を拡大できなかつただけでなく、その後はパイロットの養成や航空機の生産量が大きく開き、第2次ソロモン海戦を境に空母部隊はほぼ戦闘力を失ってしまった。

一方、反攻に転じた米海軍は43年5月にはアッツ島、7月には中部ソロモン諸島の防衛の中枢であるムンダ島、9月にはニューギニアのラエ、サラモア、10月にはブーゲンヴィル島至近のモノ島に上陸した。これに対して43年4月には母艦機を投入し「い」号作戦、11月には「ろ」号作戦を行ない母艦航空兵力を消耗してしまった。山本長官は開戦初動に大打撃を与えた後は、主導権を握って敵を叩いて行かなければ、国力に劣る日本海軍は日を経るにしたがい不利となると連続的な攻勢作戦を続け、ガダルカナル半年の攻防戦で、空母1隻、戦艦2隻など29隻の艦艇を失い、航空機2,076機を消耗させ、43年秋に米海軍が本格的な進攻作戦を開始した時には、反撃の中核となるべき航空戦力をほとんど使い果たし、その後は敗北を重ねなければならなかった。

山本長官や後任の古賀峯一長官には、42年中ならば勝算5分、43年初期を界として勝算は3分に低落するという日米の動員能力比、国力比

が脳裏にあったと考えられるが、緒戦の勝利から自信過剰となり戦線を拡大したため、海上輸送力がネックとなって、外郭要地の要塞化や占領地域の資源利用などが進展せず、脆弱な防備の島嶼で連合国の反攻を迎えなければならなかった。

★中部太平洋の航空戦

ガダルカナル戦では3隻程度であった米空母が、1943年中期以降は第2次、第3次ヴィンソン計画などで完成した空母や高速戦艦が戦列に加わり、高速戦艦に護衛された高速空母部隊が続々と誕生し、それに伴い米海軍は空母3から4隻で1個任務群を編成する集中方式に変えた。9月には2個任務群で南鳥島、11月11日にはラバウルを襲撃したが、11月20日にマキン、タラワ島に上陸を開始した時には4個任務群編成で、空母11隻、戦艦6隻、巡洋艦6隻など45隻に増加していた。

米軍にとってタラワ攻略戦は最初の本格的な強襲上陸作戦で、不慣れで装備も不十分なため犠牲も多かったが、この作戦こそが対日戦争計画（オレンジ計画）の第一歩であった。タラワに引き続き44年1月29日にはマーシャル諸島のクェゼリン環礁に上陸したが、この作戦では第58機動部隊の兵力は62隻で空母は12隻に増加していた。これに対して7回の陸上機による攻撃を加え、大本営は空母7隻を含む12隻を撃沈、空母4隻含む10隻を撃破したと発表した。実際は護衛空母1隻撃沈、軽空母1隻小破に過ぎなかった。

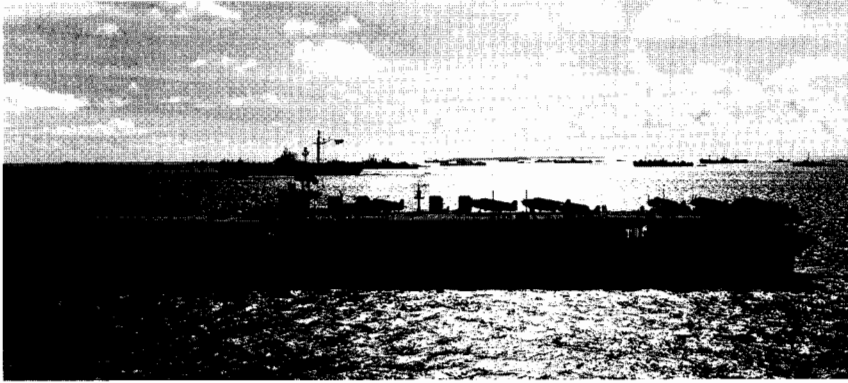
さらに2月17日早朝から18日には4回にわたり、第58機動部隊の3群（正規空母6隻、軽空母4隻、戦艦6隻ほか）にトラック島が奇襲され、艦艇9隻、輸送船など32隻を撃沈、艦艇9隻と航空機270機を破壊され、トラック島の中部太平洋の作戦中枢基地としての価値を失った。

★日本空母部隊の最期

ミッドウェー、ガダルカナルをめぐる航空消耗戦で練



第2次ソロモン海戦で撃沈された軽空母龍驤。



比島沖海戦直後の1944年10月31日、ウルシー泊地に集結した米機動部隊。画面手前は軽空母ラングレー Langley CVL-27である。(U.S.NAVY)

達のパイロットを失った日本海軍は、攻勢作戦から守勢作戦に転じ絶対国防圏を決め、南洋群島配備の陸上航空兵力を活用する邀撃漸減作戦に転じた。この作戦は各島に展開した航空機を機動集中して反撃するもので、日本海軍は44年3月までに航空戦隊21隊を南洋群島の島々に配備し第14航空艦隊を新編し、「あ」号作戦までに1,552機を配備しようとした。しかし、これら航空戦隊は圧倒的な米機動部隊の奇襲攻撃を受け、44年2月17日にはトラックで270機、23日にはグアム、サイパンで123機、3月30、31日にはパラオで203機を失った。

このようにして、不沈空母南洋群島は機動と集中による圧倒的な母艦航空兵力により無力化されたが、100海里から200海里離れた島嶼に分散する航空機を機動集中運用をするには、優れた早期警戒網と指揮通信組織が必要であったが、日本海軍にそのような組織的防空システムはなかった。このため優勢な航空兵力を機動集中できる空母部隊に、ヒット・エンド・ランの急襲を受け各個に無力化されたのであった。

44年6月15日に米軍がサイパンに上陸し、「あ」号作戦が発令されマリアナ沖海戦が始まった。日本海軍は米海軍の4個機動群、空母15隻（大型7隻、小型8隻）に対して、正規空母5隻、軽空母4隻を集めたが、搭載機数は米海軍の956機の半数の439機に過ぎなかった。しかし、海戦は日本海軍願願の先制攻撃とアウト・レンジ攻撃で始まり、勝報を待ったが、攻撃隊は空母のはるか前方でレーダーに探知され、圧倒的多数の戦闘機の迎撃を受け「マリアナ沖の七面鳥狩り」といわれるほど易々と撃墜されてしまった。日本海軍はこの海戦で空母3隻を失い4隻が撃破され、378機とパイロット388名を失ない、ここに日米の最後の空母対空母の対決は終わり、実質的には太平洋戦争にも敗北していた。

41年9月6日の開戦を上奏した御前会議で、永野修身軍令部総長は迎撃予定海面で戦うならば、「飛行機ノ活用等ヲ加味考量致シマスルニ、勝利ノ算ハ我ニ多シト

確信致シマス」と昭和天皇に奉答したが、南洋群島を利用した航空戦備の充実が海軍を開戦に踏み切らせる一因とはならなかったか。

また、さらにさかのぼれば、南洋群島を利用した陸上航空兵力への期待が、海軍をワシントン条約離脱へと導きはしなかったであろうか。

沖縄攻略作戦が開始されると、ハルゼー中将指揮の

第3艦隊の4群の空母部隊から成る第38任務部隊（大型空母8隻、軽空母5隻）を含む総数95隻が、10月10日に沖縄本島並びに周辺の島々を、10月12日には台湾を襲撃し、これに対して日本海軍はT攻撃部隊を投入、ここに台湾沖航空戦が始まった。T攻撃部隊とは優秀な搭乗員を各部隊から選抜して編成した部隊で、迎撃機が飛行不能な夜間や悪天候時を狙って、索敵機が高空より照明弾を投下、照らし出された敵艦船を攻撃する精鋭部隊であった。そして数次にわたる攻撃で撃沈、空母19隻、戦艦4隻、巡洋艦7隻、その他艦種不明15隻を撃沈あるいは撃破したと、現地部隊から報告があった。大本営はこれの評価をすることなく、23日には軍艦マーチ付きで大戦果として放送した。現地部隊も過大戦果を信じ、米艦隊の防空能力が大きく低下したと380機を投入した。しかし、多数の迎撃機と激烈な対空砲火により244機を失った。

さらに戦果誤認の事実を海軍から知らされなかった陸軍は、ルソン島決戦をレイテ島決戦に変更し、第1、第26師団をはじめとする決戦兵力をレイテ島へ輸送した。しかし、第1師団を除く大半が輸送途中に母艦機の空襲を受けて水没してしまった。さらに、兵力を引き抜かれたルソン島へは台湾から第10師団、台湾へは沖縄から第9師団を移動させる玉突き配備で、沖縄の戦力不足を招いてしまった。

この過大戦果の大本営発表を傍受していたウォール街では株の暴落が起り、作戦部長が心配してハルゼーに問い合わせると、「わが艦隊は全艦海底から蘇り、現在戦闘中」との返電を発し、ユーモア好きなアメリカ人のハルゼー人気を高めた。

また、台湾沖航空戦の敗北が特攻戦術を海軍に採用させる契機となった。特攻兵器の開発や部隊配備は進みつつあったが、投入時期は明確ではなかった。しかし、10月4日に大西瀧治郎中将が第1航空艦隊司令長官の辞令を受けフィリピンに向かっていたが、この空襲で台湾で

足止めされ、着任できたのは戦闘終了直後の17日であった。着任し日米航空戦力の実情と残存戦力の実態を知ると、大西中将は特攻隊の編成を命じ、10月21日には最初の神風特別攻撃隊がマバラカット飛行場を飛び立った。

44年7月10日に日本海軍は残存空母4隻、航空戦艦2隻をもって第3艦隊を再編成し、錬成訓練を開始した。しかし、編成2カ月後にマッカーサー軍がレイテ島に上陸し、10月18日には「捷一号作戦」が発動されたが、パイロットも航空機もない第3艦隊には、もはや空母機動部隊としての任務は与えられなかった。与えられた任務は大和・武蔵などの水上打撃部隊をレイテ湾に突入させるため、米機動部隊を北方に牽制する囮であった。第3艦隊は10月24日にルソン島北東端のエンガノ岬に達し、ハルゼー部隊を発見すると、護衛戦闘機18機を残して全搭載機を今後の活躍に期待して陸上基地に向け発艦させた。第3艦隊はハルゼーの部隊を北方に「吊り上げる」という囮任務は完全に果たしたが、ハワイ以来の歴戦の瑞鶴をはじめ4隻の空母を失い、ここに日本海軍の空母機動部隊は消滅した。しかもレイテ沖に達した大和以下の水上打撃部隊は、栗田健男中将の闘志不足から反転し、輸送船を叩き陸軍部隊を支援するという作戦目的を放棄してしまった。

★「月月火水木金金」の果てに

45年3月初旬から沖縄上陸作戦に備え、ミッチャー指揮の第58機動部隊が九州や四国の航空基地を連続的に攻撃し、4月1日には沖縄への上陸が始まった。沖縄への上陸が始まると日本海軍は戦艦大和以下の水上特攻を出撃させたが、大和はミッチャー中将指揮の第58任務部隊の4個機動任務群の386機の攻撃を受け（ハンコック Hancock CV-19の51機は大和を発見できず不参加）、7日14時に坊ノ岬沖の海に消え、3年3カ月の短い生涯を閉じた。

大和が沈んだ前日の4月6日から6月22日まで、日本海軍は10次にわたる「菊水特攻隊」、940機（2,045名）、陸軍も加えれば1,827機（3,067名）を投入し、連合国艦船33隻を撃沈し124隻に被害を与えたが、米軍の進攻作戦を止めることはできなかった。航空特攻総攻撃が始まると、ミッチャーの第58任務部隊に九州や四国の飛行場、呉や佐世保軍港などの艦艇が攻撃され、日本には水上・水中特攻艇と竹槍しか残らなかった。

5月末には「殺せ殺せジャップを殺せ」をモットーとしたハルゼーの第3艦隊に交代、6月に入ると英機動部隊（空母4隻、戦艦2隻など22隻）も加わった。第3艦隊の攻撃は関東地方、本州北部から北海道に拡大し、さらに戦艦・巡洋艦戦隊も浜松、日立、釜石、室蘭などを砲撃したが、この第3艦隊の兵力は正規空母8隻、軽空

母6隻、戦艦8隻、巡洋艦16隻、駆逐艦62隻で、この部隊を支援するために軽空母4隻の対潜部隊や予備機搭載の護衛空母や給油艦、給兵艦、給糧艦など150隻の洋上支援部隊があり、さらに支援部隊を護衛するため軽空母10隻、駆逐艦18隻、護衛艦27隻が配備されていた。

このように日本海軍の敗因はアメリカとの生産力、国力の差にあったが、海軍がサイレント・ネイビーの伝統や貧乏海軍の体質から、演習などでは政治や経済を想定外とし、少数精鋭主義を掲げ「月月火水木金金」と、戦争の一局面に過ぎない艦隊決戦を日米戦争としてしまったことに、日本海軍敗北の最大の原因があったのではなかったか。

★おわりに

戦後の米第7艦隊は、西太平洋からインド洋にいたるアジアから中東のホットな戦争から低次元の危機にいたるまで、「平和のための即応力(Ready Power for Peace)」をモットーに、同盟国へのコミットメントの象徴として同盟国の平和と安全を支えてきた。この第7艦隊の主戦力が空母機動部隊であり海兵隊だが、これらの部隊は日本海軍との血みどろの戦いで身につけ改善し発展してきたものであった。「昨日の敵は今日の友」との格言があり、沖縄には海兵隊が駐留し、冷戦がピークを迎えた1973年には、日本海軍が苦汁を嘗めさせられたミッドウェー海戦の名を冠したミッドウェー Midway CV-41が、世界で初めて横須賀を母港として日本に配備され、そこから通常空母2隻を挟んで、昨年9月には原子力空母ジョージ・ワシントン George Washington CVN-73に替わった。2006年の北朝鮮のミサイル発射には世界でただ1隻、迎撃システムを装備していたイージス艦シャイロー Shiloh CG-67がハワイから駆けつけて日本を守った。

しかし、アメリカのアジア戦略が中国重視へと変わり、中国に配慮して最新鋭戦闘機F-22の対日輸出を禁止するなど、アメリカの対日コミットメントの信頼性が揺らぎだした。一方、日本の新政権内部には親中派、反米派も少なくなく、日米両国の民主党の戦略が同一ベクトルにあるが、まさか民主党はジョージ・ワシントンを手放し「友愛外交」で、日本の安全を確保できると本気で考えているのであろうか。ジョージ・ワシントンが日本を去る日は、アメリカが中国による東シナ海海底資源や尖閣列島の処分を黙認するシグナルでもあることも覚悟しておくべきであろう。

◆参考文献

富永謙吾編『定本・太平洋戦争』（図書刊行会、1981年）
Norman Polmar, Aircraft Carriers : A History of Carrier Aviation and its Influence on World Events, Vol 1(Potomac Books, 2006)